

六、 記念式典に至るまで

記念式典典に及ぶるまで

明治四十三年（一九一〇年）現在の繊維学部が上田蚕糸専門学校として創立されて以来八十年を迎え、平成二年十月記念式典が催された。事業の一環として写真集『繊維教育八十年』を出版することが同窓会「千曲会」で決定され、平成一年からその編集に一員として取りかかった。その外郭が出来てくるうちに、学部の創立記念はもとより、現在の応用生物科学科、素材開発化学科がやはり創立記念を行っているが、我々の繊維システム工学科は全く行っていないのに気付いた。これが学部の、ひいては学科の発展に重要な縦のつながりをなくしているのではと案じた。

繊維システム工学科の歴史をひもといてみると、その始まりが絹糸紡績科で大正八年（一九一九年）に創立され、平成六年（一九九四年）で七十五年になることがわかった。同窓会の最新の名簿を見ると、一回生から六回生までに一・二名づつがご存命で、この際七十五周年を行っておかないと禍根を残すのではと感じた。そこで学部現在籍されている中沢先生、清水先生などにそのことを相談したのが今回の発端となった。清水先生には、繊維システム工学科に残っている先生方が中心になって計画し、他学科にいる我々が支援する形がよいのではと進言しておいた。その後日にちが過ぎ、平成四年の春を迎え、中沢先生から「一志先生の退官記念会」に誘われた。その席で先輩の久保さん（信州ハム）、西沢さん（シナノケンシ）

らに会う機会を得、記念式典を打診した。そうこうしているうちに、平成五年を迎え清水先生をせき立てた。

清水先生は、このことを東京在駐の浅山さんをはじめ今回事務局をお世話願った武居さんらに相談され、東京地区の同窓生の支援をいうことで、平成五年八月二十八日蚕糸会館に宮沢松治（学一）、山際 明（学二）、小泉孝雄（学三）、井出敏三（学五）、正村統三（学五）、古川元彦（学五、大阪在駐・特別参加）、清水忠治（学六）、浅山俊幸（学八）、幾原敏行（学八）、清水重人（学二十三）、武居正和（学二十三）、佐々木和也（シ一）各氏に集まって頂き、大学から清水義雄先生（学二十一）と山浦（学十三）が参加し、『繊維システム工学科創立七十五周年記念事業』を行うことに賛同願ひ、まず最初の発会式とした。その力強い賛同を持ち帰って十月繊維学部在職の外国出張中の三浦幹彦先生（学十九）を除く中沢 賢（学八）、松本陽一（学十九）、西岡孝彦（学二十）、高寺政行（学二十九）、坂口明男（学三十五）各先生に集まって頂き相談した。その際、不況、事務等いろいろ問題点が指摘された。多少不安であったが、大阪での学会出席を機会に、十一月十五日化繊協会に羽場清人（学三）、柳沢涵一（学三）、池田義信（学五）、滝沢啓造（学五）、武井武文（学五）、古川元彦（学五）、箱山宗一（学十一）、松倉 洋（学十一）、榎本誠治（学十三）、大前保夫（学十三）、坂倉晴彦（学十三）、小林俊朗（学十四）、石倉信作（学二十二）、武村 治（学二十二）、山本貴則（学三十七）各氏に集まって頂き、記念事業に賛同願った。

記念事業のうち、シンポジウムや祝賀会はやはり懐かしい上田でのこと、また講堂を使って何かをとの要望が多かった。地元での開催となると、長野県地区の同窓生の賛同も得ねばとのことで、十一月二十日千曲会館会議室に阿久津伊平(紡十七)、桜井幸男(紡二十三)、舟見甲子郎(紡二十四)、柳沢 信(紡二十四)、塩澤久延(紡二十六)、土屋幾雄(紡二十六)、久保忠夫(紡二十七)、丸山 裕(二十八)、西沢 豊(学二)、小島 脩(学四)、吉池昭(学六)、片岡武志(学十四)、山崎君昭(学二十一)、青沼務(学二十四)、久保田啓一(学二十六)、金井孝昭(学三十五)、南澤信之(学三十五)、唐沢朋久(学三十七)の各氏、大学から中沢、松本、三浦、清水、高寺、坂口の各先生と山浦が出席し、記念事業の賛同を得た。また、十二月二十三日の千曲会総会時の昼食時の折り、関口準司(紡二十四)、舟見甲子郎(紡二十四)、山岡正邦(紡二十九)、小泉孝雄(学三)、浅山俊幸(学八)、土屋成令(学八)、春原正心(学紡系十一)、馬越芳子(学十三)、田中正一(学十八)、中井秀一(学十九)、清水重人(学二十三)、武居正和(学二十三)、佐々木和也(シ一)各氏ならびに大学側から中沢、西岡、清水、坂口の各先生と山浦が出席し最終の発会式とした。その際実行委員長に中沢 賢先生、事務局長に浅山俊幸氏を選出し、事務局を武居正和氏に依頼することとした。その後副実行委員長に笠原義昭(紡二十七)、小泉孝雄、古川元彦各氏、事務局に清水先生、清水重人氏と山浦を加えこの会を発足させた。それまで五ヶ所で発会式的なことを行ってきたが、『織維システ

ム工学科創立七十五周年記念事業』の成功を期すためさらに数多くの同窓生の賛同を得ることが必要だろうと、発起人予定者を土屋・清水両先生と山浦で二百数十名選び、平成六年早々に依頼状を出した。当方の不案内から、家族からの訃報も数名から寄せられたり、高齢による健康への不安等で十名程度から発起人辞退があったが、約百名から同意の返信が届き心強い限りであった。卒業生約二千名で発起人百名程度では幾分寂しいのではと、時間的制約から事務局一存で百名程度発起人に追加させて頂いた。その方々にはこの紙面を借りお詫び方々感謝申し上げる次第である。

同窓生全員に記念行事の案内状を出すまえに、行事内容と日程を詰め、記念誌発行、シンポジウム、祝賀会、宿泊同窓会を行事内容とし、記念誌の責任者に浅山氏、シンポジウム(講堂)の責任者に清水先生、祝賀会(ささや)の責任者に山浦、宿泊同窓会(南條旅館)の責任者に清水先生を選び、また大学在職の先生方への細かい分担も決め、案内状の作製に取り掛かった。シンポジウムにノースカロライナ州立大学のブキヤナン教授と野村絵研の山田澤明氏に墓調講演をさらに渡辺商店社長渡辺義明(学紡六)、住江織物社長近藤貞彦(学化七)、東邦レーヨン本宮達也、織維産業構造事業協会幾原敏行(学紡八)、東京工業大学名誉教授宮坂啓象(学紡五)、日経産業消費研究所浅井恒雄各氏に講演を依頼すること、同窓生からパネラーを募りパネルディスカッションを行うという案を考えて頂いた。快く引き受けて下さった各氏に心から感謝する次第です。平成六年三月末をめどに、同窓生全員に記念行事の案内状を出す

よう作業を続けたが、四月にずれ込んでの通知と相成った。案内状は郵便物の値上がりを考え、学部同窓会発行の『千曲会報』が確実に届いている同窓生のみ（約六十五パーセント）に配送した。クラス委員も決め、全員の住所を確認してからの通知を考えたが、思うようにまかせず通知漏れとなった多数の方々にお詫び申し上げる次第です。今後のことも考え、移動される場合必ず同窓会『千曲会』事務局に御一報願いたい。今回の案内状の配送に当たっては、清水先生の奥様に多大のお世話をおかけした。この紙面を借り感謝申し上げます。上げる次第である。

五月の連休明けには、案内状を出した人の約三十パーセントから返事があり、シンポジウム八十名、祝賀会九十名、宿泊同窓会五十名と多少少な目であるが、まあまあ参加者のあることに意を強くするとともに、寄付も約三百八十口あり、今回の事業の成功を確信した。ただし、案内状に記念誌への自由投稿を全員に募ったが、投稿予定者が三十名程度と少なく、事務局を慌てさせた。事務局で手分けして、電話等で原稿を募ったが、忙しい中にもそれに応じて原稿を寄せて頂いた方々に感謝申し上げます。また恩師の先生方にも並行して原稿を依頼したが、忙しい中原稿をお寄せ頂いた恩師の先生方にも感謝申し上げます。上げる次第です。

この記念誌を作る最終段階でのシンポジウム参加予定者数は約百名、祝賀会参加予定者数は百十数名で、寄付者三百余名で合計四百八十数口の寄付金が集まった。シンポジウム・祝賀会参加予定者ならびに寄付予定者の名簿は他のページに記した。今回の事業に多数

の方々から賛同頂き多額の寄付を頂きました。また卒業生のいる会社にもシンポジウムの開催通知と同時に寄付も依頼しましたが、時節柄にもかかわらず多数の会社から多額の寄付を頂きました。合わせ記念誌に掲載させて頂きました。お陰様で記念に繊維システム工学科の益々の発展を願う意味を込めた図案のネクタイピンを伊勢隆氏（学系六）のデザインにより作り、皆さんに配布することが出来た。この紙面を借り衷心より感謝申し上げます。またシンポジウムを共催して頂いた「先端繊維科学技術教育研究機関誘致期成同盟会」からも補助金を頂きました。合わせ感謝申し上げます。

残金がある場合は、実行委員で相談の上、繊維システム工学科ならびに繊維システム工学科の一講座が加わり新たに開設される予定の感性工学科の発展のために使用させて頂きたい。また何かご意見がございましたら事務局にご一報をお願いしたい。

先にも記したように、我が『繊維システム工学科』で今回がはじめての記念事業であるが、今後も節目節目に学科の発展を期してこのような事業が開かれることを念じ筆を置く。

山浦（学紡十三）記

信州大学繊維学部
繊維システム工学科
創立七十五周年記念会

実行委員長

中沢 賢(学紡八)

副実行委員長

笠原 義昭(紡二十七)、小泉 孝雄(学紡三)

古川 元彦(学紡五)

事務局長

浅山 俊幸(学紡八)

事務局補佐

山浦 和男(学紡十三)、清水 義雄(学工二十一)

武居 正和(学工二十三、事務局)

清水 重人(学工二十三)

実行委員

松本 陽一(学工十九)、三浦 幹彦(学工十九)

西岡 孝彦(学工二十)、高寺 政行(学工二十九)

坂口 明男(学工三十五)、古川 貴雄(学工三十九)

発行 繊維システム工学科

創立七十五周年記念

事業事務局

発行日 平成六年十月一日